

牛群検定通信 No177

～搾乳牛率～

今回は、検定成績表の基礎中の基礎である「搾乳牛率」を紹介します。搾乳牛率は経産牛に占める搾乳牛の割合という単純な検定成績です。このような単純なことから、実に様々な課題を見いだせます。

1 搾乳牛率とは

搾乳牛率は、検定成績表の1枚目の中央の「移動13カ月成績」の左端に、経産牛頭数、搾乳牛頭数とともに表示されています。

基本的な考え方は、(搾乳牛頭数) ÷ (経産牛頭数) として計算されています。ただし、特殊な頭数の数え方をするので電卓を叩いても一致しません。

例えば、経産牛1頭しかいない農家で、月半ばで分娩し15日間は搾乳し、15日間は乾乳中だったとき、経産牛としては1頭ですが、搾乳牛頭数としては、 $15 \div 30 = 0.5$ 頭として数えます。

2 搾乳牛率の目標値

分娩間隔 380 日、乾乳日数 60 日で繁殖が順調であれば、85%程度が目標値となります。ただし、この指標は高くとも低くとも好ましくありません。移動 13 カ月成績のなかで安定して 85%を維持することが大切です。

3 搾乳牛率が 90%以上の場合の課題の例

乾乳で休んでいる牛が少ないのだから、生乳生産として良いことと、考える方もいらっしゃると思いますが、一般には次に挙げるようなことが課題として内包していることがありますので、牛群管理を見直す必要があります。

課題 1 分娩間隔の長期化

1 頭 1 頭の搾乳期間の延伸、つまり生乳生産量の低下につながります。

課題 2 繁殖障害（淘汰）の増加

乾乳を迎える前に淘汰されれば、搾乳牛率が高くなる場合があります。

課題 3 乾乳期間の短期化

乾乳期短縮法も提唱されているので、それを実践されているのであれば問題はありません。しかし、分娩予定日を失念し、次産分娩の間際になってあわてて乾乳するケースが増加しているのであれば好ましくありません。

課題 4 初産牛比率の増加

2 産、3 産の牛群割合が少なければ、乾乳の牛も少ないことになります。

4 80%未満のとき、または年を通して上下が極端なとき

課題 1 乳房炎などの病気

治療のため早期に乾乳してしまう牛が多い場合など。

課題 2 夏季の繁殖成績の悪化

秋から冬に一斉に受胎する牛が極端に多い場合、一斉に乾乳、一斉に分娩し、年間の搾乳牛率が乱高下します。

(相原)